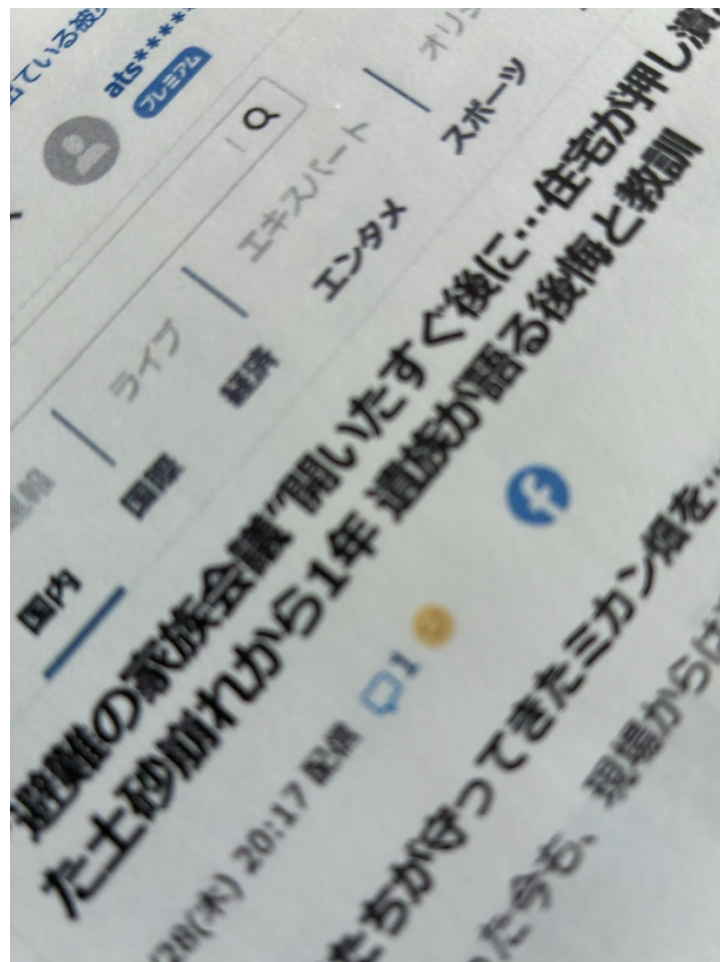


第121回 本能に勝る防災なし

I T 生

土砂災害は予測がもっとも難しい災害のひとつだといわれる。
ネットニュースをみていたら、1年前の愛知県蒲郡市のことが話題になっていた。
東海テレビの記事の見出しが「避難の家族会議開いたすぐ後で…」とあったのが目を引いたのだ。

記事によると、5人家族のうち3人が土砂災害で亡くなった。生存した2人の娘のうちの1人が証言している。証言では、当時、この地域は台風による警戒が呼びかけられていて、家族で避難会議を開き、翌朝に行政に相談しようと申し合わせていた。その夜に土砂崩れが起き、二階建ての民家が押しつぶされたのだという。



自然観を養うことの重要性を教えてくれる記事

土砂に巻き込まれた民家のあたりは、市のハザードマップでは土砂災害の警戒区域ではなかったが、この家族に「後背地の山の状態がおかしくなっていた」との認識はあり、件の女性は、何かが起こるかもしれないとのカンが冴え、おのずと身体が構えていた分、土砂が崩れてきた瞬間もまばたきの間隔で身をひるがえしたのが奏功したという。

蒲郡市ではこの家族の教訓を生かし、ハザードマップに加え、各地域の住民が話し合い、その地域で過去に実際に起きた災害とそれにより被災した地区を地図に落とし込む取り組みを進めている。

東日本大震災の際、子供たち3000人が津波から自主的に避難した「釜石の奇跡」では、そこにいたる過程で、防災教育を指導した片田敏孝・東大特任教授は、子供たちに津波避難三原則「想定を信じるな、最善を尽くせ、率先避難者たれ」を示すことで、自然への恐れを養い、自分たちの本能を磨くことを奨励し、まさにそのことが実践されたのだ。

寺田寅彦師はいう、

—社会が災害をなくそうとすればするほど、(人間の依存心が高まり、)人間の頭の働きは平均して鈍いほうに移って行く勘定である—と

釜石で子供たちを指導した、片田氏は、子供のころ、故郷の山や川を駆け巡っていたそうだ。子供の教育は自然への親しみと恐れを醸成することがまずは第一に考えられるべきであろう。そのことは、自然観のみならず、人間も自然の一部を考えるならば、人間同士のコミュニケーション術にも生かされるだろう。コミュニケーション不全の大人が横行している今日、やはり自然へのカンを磨く教育は不可欠だと考える。

(令和7年8月)